蔵報

No.3

1950

西高山岳部

部報

3号　1950

春山報告

部員に望む　笹野章夫　一
詩夏休みが来たら　神島一郎　三

天城主脈縦走　笹野章夫　四
雲取山　中野英司　七
三頭山　南波貞敏　十
御前山　田中実　十三

夏の山行計画　二
山麓通信　十八

1950年6月　西高山岳部

部員に望む

三C　笹野幸夫

長い間、部の為に御尽力下さった鳥山先生が御栄転され、この度は新しく岸田先生を部長にお迎えして、一歩一歩と発展の一路をたどる我が西高山岳部は誕生以来、やうやくにして四年の歳月を数え、次第に充実した活動に入って来ましたが、現在のこの状態では必ずしも満足出来るものではなく部員一同のより一層の努力が今度とも必要であると私は通感致します。

幸ひ、二年生の諸君が一方ならぬ努力をしてくれますので今年度に入ってからは、部内の活動は一段と活発となり部員のまとまりもとれてまいりました。

そこで今年一年及ばずながら部の発展に努力しようと思ひます私にとって、次のいくつかのことを部員の皆様に是非とも実行していただきたいと思ひます。

先づ二年生は、もっと積極的に部の活動をしていただきたいことです。遠慮することは勿論ない。自分の思ふことをどしどし発表してもらいたい。相談の上、実行に移して行って皆様にあるべきなのだが、大体いかなる部に於いても主体は二年生なのだが、西高校友会の活動は一般に三年が中心の様です。三年は上級学校への進学もあることだし、又一・二年が部活動に興味をもつやうになって始めて今後の発展はあるのです。この点よく考へて二年の諸君は自分達が活躍しなくては山岳部は、より一層よいまとまった部にはならないと云うことを知っていただきたいのです。

次に目的を持つことです。例を山行きにとると今までの登山は縦から見ても横から見ても、どう見ても、マンゼンと登っていたのだとしか思はれません。個人々々はいかなる目的をもって、山に行っていたか知りませんが、これを部に於いて一つの目標を作れるものもっと進めて、これは強制的に急に作れるものではありません。少くとも今迄の山行の方法を反省して、どこに一貫した目標を作らうではありませんか。これはやさしいやうで確かにむづかしい問題です。しかし部の信條と云ったのでは少し変かも知れませんが、ある目的を作ってそれに向って皆で力を合せて進まい進して行きませう。

現在の我が山岳部の状態から見て高級な登山技術を修得した大学級の部には到底なれるものではありません。故にその目標は必ずしも高いものである必要はありません。旅行部と云はれてもハイキング部と呼ばれてもよいで

せう。山を心から愛する者の集りとして、そこに目標を作り、それに向って一歩々々と近づいて行かうではありませんか。

最后に部則の制度です。これは諸先輩からもいろ〳〵とお話を伺っているのですが今だに定める段取りに至らず一重に私の責任と思っていますが、これは私一人の考へによって出来る性質のものではなく前にも話したことがありますが皆で意見を持ち合って、それを討議してみた結果出来上るべきものです。部員一人々々がこんなことを部則として定めておいたらよいだらうと思ふことを心のうちでまとめておいて下さい。

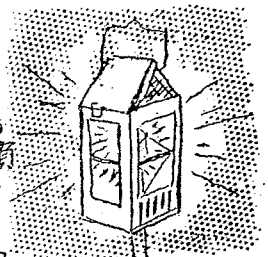
では、部員諸兄の御活躍を期待し、より良き部に発展して行くことを切に希望して冠頭の言葉にかえます。

（完）

＝新部員紹介＝

この程次の七名が入部されました。今後の部の発展が期待されます。

一C　岩堀安三
二D　村田博之
二E　鈴木輝夫
二E　中野英司
一H　野口弘至
二H　尾崎正明



夏の山行計画

◎尾瀬より日光

七月下旬（前夜発六日）

コース

第一日　沼田バス｜戸倉｜鳩待峠｜山の鼻小屋｜温泉小屋（キャンプ）

第二日　山の鼻小屋｜尾瀬ヶ原逍遥｜温泉小屋（キャンプ）

第三日　温泉小屋｜三條滝｜燧岳｜尾瀬沼（キャンプ）

第四日　尾瀬沼｜尾瀬沼（キャンプ）｜恩恕沼｜八丁の湯

第五日　八丁の湯｜根名草山｜金精峠｜湯元（キャンプ）

第六日　湯元｜中善寺湖｜日光駅｜帰京

費用　2F　佐藤信治　五百～八百円程度

◎奥秩父主脈縦走

七月下旬（前夜発六日）

第一日　信濃川上｜信州峠｜金峰山｜瑞牆山｜金峰山小屋（泊）

第二日　金峰山小屋｜金峰山｜大日岩｜朝日岳｜金峰山小屋（泊）

第三日　金峰山小屋｜金峰山｜瑞牆山｜富士見平｜高森沢入口｜高森沢入口は都合により退部されました。

第三日　大弛小屋―國師岳―甲武信岳―甲武信小屋(泊)
第四日　甲武信小屋―木賊山―破風山―雁坂峠―笠取小屋(泊)
第五日　笠取小屋―將監峠―大洞山―雲取小屋(泊)
第六日　小屋―雲取往復―白岩山―三峯神社―三峯口―帰京
係　三人神島　又は三E田中(將利)
費用　約九百円

○北アルプス縦走　前夜発五日
第一日　新宿―松本―豊科―須砂渡(泊)
第二日　須砂渡―一ノ沢小屋―常念小屋(泊)
第三日　小屋―常念岳―蝶ケ岳―大滝小屋(泊)
第四日　小屋―上高地(泊)
第五日　上高地―島々―松本―帰京
費用　約千八百円
係　二人　山口雄弘
期間　七月下旬又は八月上旬

○富士山
今夏登山を部以外の一般に普及するために全校男女生に呼びかけ富士登山をすることに決りました。部員もなるべく参加して下さい。コース及び費用期日も未定。

係　3C　笹野幸夫

―○―○―○―

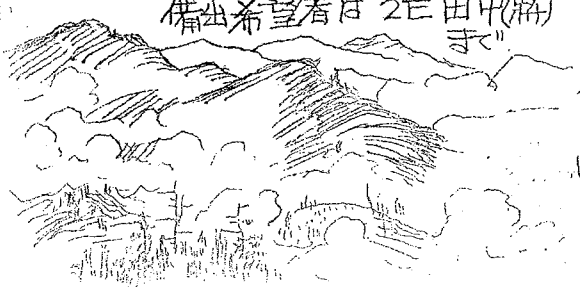
○注＝これ以外の個人山行にも、人員、コース等詳細を役員に報告する事。

部備品

部創立以来四年となり、部員の希望する備品が着々とそろってまいりました。御使用の場合は他のパーティと連絡の上使用して下さい。

3人用天幕……2張（内1張ポール無し）
大型コッフェル……1組
バーナー……2
オイルタンク……2
山刀……2（内1新品）
ノコギリ……1
ランタン……2
ザイル……1（新購入）

その他「地図」「山渓」等参考図書多数あり。
備品希望者は2E田中(將)まで



春期山行報告

第廿三回例会

天城主脈縦走

二日行程

四月一日、（雨後曇後晴）

東京駅（七・五〇）（湘南電車伊東行）―伊東（一〇・三〇）―（一一・三〇）（修善寺行バス）―厚生山荘（一一・五〇）

四月二日　（晴たり曇ったり）

厚生山荘（四・二五）―八城田橋（五・〇〇）―荻（五・二五）―（五・三〇）―朝食（六・〇〇）―（六・一五）―十足（六・三〇）―鹿路庭峠（八・四〇）―鹿路庭峠への分岐（八・四五）―食事（九・一五）―九・三〇―火之用心（一〇・一五）―四辻（一〇・五〇）―（一一・三五）―万三郎岳（一二・二五）―（一二・四〇）―馬ノ背（一三・〇〇）―万三郎岳（一三・三〇）―（一四・二五）―片瀬峠（一四・三五）―戸塚峠（一五・〇五）―水場（一五・二〇）―湯ケ島（一五・四〇）―白田峠（一五・五〇）―（修善寺行バス）―（一八・五〇）―（東京行湘南電車）―東京駅（二三・二五）

△参加人員

三A神島　三B司馬　三C高橋
三C笹野　三F横川　三H和才
三F佐藤　（特別参加山口）計八名

（経過）

四月一日　三C　笹野幸夫記

朝七時五十分東京発伊東行の湘南電車にゆられて、十時半伊東駅着。前日からの雨は一層強さを増し、風も斜めに吹きつけて四月とは思えぬ肌寒さを感じる。本州南岸に低気圧があるらしい。バスから降りて厚生山荘の玄関に飛び込んだ時は昼も近い十一時五十分。午后も雨の為、一碧湖行をあきらめて、ホールでピンポンに興じる。夕方には雨が止み、青空が顔を出す。

十時半二階寝床にもぐり込む頃、雲一つない空には月が皓々と照り山の端をくっきりと浮び上がらせて明日の天気を誓うかの様

四月二日

三時半起床。四時二十五分発。暗い水のたまった道を懐中電燈を頼りに八代田に向ふ。八城田橋を渡って荻の部落に近づく頃、夜はすっかり明け離れて四月の美しさをこゝかしこに味ふ。荻からは高原状ののんびりした広い道を、茶褐色の大室山を正面に迎

ぎ見つゝ十足に向ふ。途中朝食をとって元気百倍、部落通過後十数分にして右に鹿路庭峠への径を求め、次第に見えて来る大島・海、そして伊豆半島等を賞でつゝ眺望のきかないさびれた鹿路庭峠につく。

ここからは、直ちに防火線に沿って遠笠山への登りにかゝったが途中径を失ひブッシュの中をもぐること約一時間、中腹を巻く遠笠山経路の火の用心からやゝ東よりの所に出る。時間を予想以外に食っているので登頂をあきらめ左にまいて火の用心を径で十時五十分四辻に出る。峠らしい風のよく吹き通るこゝ四辻は確かに径がクロスしており、これから我々の挑むへと云ったのでは大袈裟だが二万二郎への径は樹木の中に消えている。

軽い間食をとって、石楠花に蔽われた細い径を一歩一歩と進む。最後の登りはつらい。汗を拭ひつゝカヤトの尾根上に出たと思ったら万二郎の頂上だ。東に以外に大きいどっしりとした大島が望める他は四方を囲む灌木の為にあまり展望は望めない。

右に九十度向きを変え、真西に聳える天城の最高峯万三郎岳へ向ふ。急な斜面を一気に走り下り、名の如く東西に細長く延びた馬の背を落葉を踏みしめながら黙って歩く。最終目的万三郎の登りも急峻で疲れた足が妙に痛む。まだかと急く心をおさえつゝ次第に速度のにぶるのを感じた頃、万二郎とは打って変った明るい山頂にたどり着く。一等三角点をシッカと踏む。時に一時三十分。海抜一四〇六・八米、眺望は申し分なく暫し忙然とする。

予定時間に大分遅ひ着いたとは云え後にバスの時刻がある事故、早々にして山頂を辞して灌木の間を片瀬峠へ下る。こゝから白田峠まではゆるい上り下り。この辺をガイドブックでは「南国情緒の香が高い」と書いているが、然程感ぜずただ急に熱くなったと感じる。

あまり峠らしくない白田峠へ着いたのが三時五十分。時間がないので八町池はあきらめて湯ヶ島に下る。下るにつれて元気の良いのが我山岳部の特徴。鼻うたまじりの気がるさで木馬道を長野に下り、鄙びた家の間を重たい足

を引きづりながら湯ヶ島に出たのが六時を過ぎること五分。下田から来るバスがおくれて後の電車の時間を気にしつゝ待合室でよごれた衣服をとりかへる。七時近くなって来たバスにゆられて修善寺駅へ。後は順調に三島へ出て東京駅着十一時二十五分。

〔後記〕

今回の山行の結果、最も強く感じたことは計画予定の不徹底であったことである。遠笠山への登りの径がガイドブックには出ておらず、そうかと云ってそれを聞いたり、良く調らべると云うこともせず、行き当りばったりの考へのもとに行ったと云うことはその良い例だ。たかゞ千米一寸の山だと云う考へが皆の心の中にあった事は確かであり（これが思はぬ難関にぶっかることが往々としてあるのだが）今後大いに気をつけねばならぬ問題だ。奥多摩に行くにも、三千米級の山へ行くつもりの心構で準備で行くに越したことはないと誰かが云っていたが確かにそうだ。今後は充分気をつけて計画を立てやう。尚、天城山は湯ヶ島方面から登るのなら湯ヶ島が即に三百米近くあるので幾だが、伊東から登るとなると主脈にかゝる迄遠く海抜〇米から登るのだから随分つらい。しかし今度の山行が伊東から出登したのも一重に適当な宿泊地がなかった理由によるもので、何と云っても天城地方に宿る所が無いと云うことは我々登山者にとって最も入りにくい原因だ。しかし温泉はどちらを向いてもある。が我々にとって手の出ないのは周知の事実だ。今回はある人の厚意によって天城に遠いとは云え大変立派な別荘に（と云ったのでは云ひ過ぎかも知れないが）宿ることが出来たが、この他に宿る所と云ったら温泉宿は別として農林省造林小屋があるだけで、こゝも本当は登山者を宿めないのだそうだが、小人数で押しかけて行けば何とかなると山渓では云っていた。又天城附近の道は案外よく踏まれている。指導標も要所々々には立っているやうだ。しかし鹿路庭峠から遠笠山への径は前述の如く不明である。峠からしばらくは防火線に沿った径があるが、間もなく二分し我々は左を左をとったのでわからなくなった。右は地図に出ている菅引への径と思ったのだが、これをしばらく行ってから左へ登る道があったのかも知れない。大体遠笠山の北面は判然とした尾根がない。そしてブッシュが多いので展望がきかないから径を迷ふ原因にもなるのだ。今後もこのコースをとられる方があったら、よく調べてから行っていただきたい。尚景色の良い所は万二郎と万三郎との間及び万三郎の頂上くらいしかない。他は樹木によって視野がふさがれ少し樹々が多いの感がある。

（十一月八日記）

第廿四回例会　雲取山　一月二日

2E　中野英司

四月二十九日(土)　晴のち曇時々雨

立川発(六・四四)―氷川(八・〇三)〜(八・五〇)―鴨沢(〇・二〇)〜(一〇・二五)―小袖―尾根上(一・〇五)―(一・一五)―(二・四〇)〜(一二・四五)―七ツ石山分岐―水場(一三・〇〇)―(一三・一五)―雲取山―ブナ坂(一四・三〇)―(一四・一〇)―武州雲取小屋(一六・〇〇)―食事(一六・四五)―武州雲取小屋

四月三十日(日)　晴

武州雲取小屋(四・一五)―雲取山(四・三五)〜(四・五九)―大ブナ―食事(六・〇〇)〜(六・五五)―展望―松谷流(七・二〇)〜(七・三〇)―大ナダレ―食事(一〇・三〇)―展望―松谷出合(一〇・二〇)―孫惚谷出合(一三・四〇)―日原(一四・四五)〜(一五・一〇)―小川谷出合(一一・四〇)―倉沢橋(一四・二〇)―氷川(一六・二五)〜(一七・〇〇)―立川(一八・二六)　解散

△参加者　L平沢(2A)
2A山口・笹田　2B森沢　2D村田
2E中野・田中(実)(幹)鈴木
2G平沢・鴻池
以上12名

氷川発の丹波行バスはぎゅう〜〜。鴨沢に下りた時は鴻池に僕がよってらく〜。この山以後僕は全然調子が出なかった。鴨沢からの上りは尾根の陰をまく道、尾根の上に飛び出てからはかなりの急勾配の道、七ツ石分岐から水場で一休み。つめたいうまい水をのむ。このあたり僕の持って来たペニシリン大分はんじょう。皆まめが出来たらしい。この辺から空模様があやしくなり、遂にポツポツ来る。しかし大したことはなく、大ブナまでは皆もく〜と歩く。ブナ坂で食事。皆元気はよい。この辺空は降るでなし降らぬでもなし。薄い霧が一面にひろがっている。すぐそばのサルオガセ、赤ばんだ白樺、新緑の木々が霧の中にかすんでいるさまは実に美しい。ドビッシーの音楽を想はせる。雲取山迄気は相分あせるがなかなかはかどらない。汗はむかすぐ冷って寒い。やはり高山だなあ。皆で谷が深いなあと一驚する。雲取山の景色が又何とも云へない。霧にかすんだこの景色はドビッシーの交想曲の中の雲を想はす。今よもあの木管楽器の印象的メロデーが聞えて来るやう。寒い。数分にしてガタ〜と来る。小屋迄の下りに方々に残雪を見た。道はぐしゃ〜で歩きにくい。小屋につくと社員。下の方の奥だおしこめられる。皆は元気よくはゐまゐっているが僕は大分くたびれた。早速飯をたいて食事。続くと登山者がやって

来るが遂に六時過ぎあとから来る人々はみなことわられていた。ちょっと気の毒になる。上下合せて百八十の客だそうだ。ギョッ!!人間が多い為ふとんはださないとの事。ウーン。皆ダルマのやうに着て折りかさなって横になる。上をのばせないので立膝。帰返りさへ出来ない。ウエー。この様ではとうていねむれない。十一時に二度。寒い。足がぞくぞくする。外は濃い霧。リーダー平沢が仙人から日原谷附近を聞く。雪は全然ないとの事。熊は今年になって十頭とった。そして昨日七ツ石附近で見たものがあるとの話。よけい寒くなる。皆ねむれないらしい。山口は持参の毛布にくるまって気持よげに寝ている。腹具合の悪いものが大分いて僕の持参の薬が大分はんじょうする。注射を鳴迫鈴木にうってやる。ちょっとまどろむと三時半。皆がさごそと動いている。御来光を見ようと来り四時出発。雪取山に登った時は東の空がわずかに赤るんで来る。千五百米位の高さに一面の雲海が出来あがっている。実にすばらしい。見る前に白石山の向ふに甲武信を中心に山が連り、南東に七ツ石、鷹巣六ツ石が頭をのぞかせている。さっと太陽が雲海を突き破って上って来る。すばらしい。まったくすばらしい。実にすばらしい。来てよかったなあ。カメラをだれも持って来ていないのが実に残念。気がついてあわてて出発。大翔で火をどんどんもやして朝食。なかなかうまい。さっぱりする事に決し下りにかかる。新しく道を切り開いたらしく、絶の切り株がいっぱい。唐松谷は可懐谷だが道は谷の五十米位の上をうねうねと通っている。道とは云へない。闘争かな。いっかげんひやひやする。まだ時間が七時と聞いて皆のんびりする。出合はすばらしい。上流の可懐さを見くびって谷筋を下ったら絶対に出合を抜け切れない。二回目の食事の後地図の道を見過して川筋を行く。歩きにくい新道をえらんだのは失敗。出合から孫惣谷、小川谷の合流点を見ながらの道で日原迄六時間かかっている。本当に

しないのが当り前だ。グロッキー気味でふら〳〵する。いやはや。絶体にこの道を通るのは厭目。地図上の径を通らねば。倉橋から六名がバスに乗る。他は氷川迄歩いた。実に愉快な登山だった。皆がこの登山に気をとられたのは成功だったと云へよう。たゞ僕がグロッキーになったのをのぞいては。このコースの注意しなければならぬ点は絶体に日原から新道には入らず地図上の道で唐松谷の出合に行くことである。この辺は「山と高原」の四月号の地図が参考になる。但し小河内線の日原がいくぶんこれと異っている。（完）

○反省　M.T.記

僕はLEADERではないのだから、この山行に対して、あまりとやかく云はぬ方が良いかも知れないが今後の部の発展に、何らか今回の山行に感じたことをのべさせてもらう。

概して云へば今回の山行は、十二名と云う団体の行動があまりかんばしくなかったと云へやう。

一、パーティの統合不完全

氷川――鴨沢間のバスによりグロッキーになったものがあったとは云へ、あまりにも休息をし過ぎたやうに思ふ。弱いものを中心として行動したのは良いが、雪取迄食事をのぞいて六回もの休みがあり、これによってより疲労を増した場合、パーティが完全に二分してしまった。

二、個人的感情による不和

雪取小屋による一夜から一部の人達に対する感情の突端があらわれていたやうに思ふ。殊にそれが小屋出発の場合にあらわれている。確かにこれは許されるべきものではなく、お互に自覚して行動を善き方向に導くべきである。

三、パーティ分裂

唐松谷のガレ場では殆んどリーダーの命をきかなかった事に始り、ばらく になった事は最悪の状件を考へると危険なものであり　殊に弱いものがあった時はトップも考へるべき

であろう。日原谷新道の桟橋は、なれなかったためか、桟道の木は新しいのであったのだから時間のあまりにもかゝったのは一つはパーティの不合によるものであったらう。

今振り返った事が主に時間をかけすぎた理由だと思ふ。又この山行が行程の短期間であったから良いものだが夏休みの長期間の合宿山行きには、いさゝか心配される。もう一つこんな事を云うと「エチケット」ならぬ「エチケット」と云はれるかも知れないが、本当に山仲間を愛してもらいたい。（もゝみに自樺を切っていた）又唐松谷で、故意に足を滑ら(せ)て落すものがあったなど部員として恥ずべきである。

最後に今回の山行ではリーダーの注意を弁って最も弱いものを中心に行動してもらいたい。

（六頁より）

ゴム三郎の眼望其到底僕などの筆によって書き表ゆすことの出来るものではなく、寧ろここに書かない方が何か暗示するものがあってよいのではないだらうか。

最後に今回の最初の参加予定者は十数名にものぼったので、新しい試みとしてこれを二つのパーティに分け、同時に一方は湯ヶ島・天城峠方面から、一方は伊東方面からと箇々に縦走を行ったら面白いと思って計画していたが、残念ながらその日の参加者が少くこれを近々に行うこと再び試みとなった。今後の縦走計画に於いて参加者が多い場合があったら、こう称に二つのパーティで互に反対側から登って縦走―どこかで会うと云う風にしたら面白い。

廿五年度送別会

三頭行

OB　南波貞敏

日原川の瀬音に目をさまされ、いつまでたっても眼りにつけない頭を右に向けたり左に向けたり目を閉じたり開いたり。しかし目的を助けてくれるものは何も無く唯隣の人のおだやかな寝息に増々神経は苛立って来るばかり。山荘のスヽて真黒く汚れた梁をボンヤリ眺めている内に、とうとう東の空は白々と明け離れて来てしまった。早立ちの人達の楽しさうな話声につられて、もう床の中にじっとしては居られない。「バスの中でゆっくり寝ることにして、もう起ちまえ！」こう一人言を云って起さては見たものゝ寝不足の為頭の中はドンヨリとして未だに夢を見て居る様な気がして仕方なく、頭を叩きながらバスに乗ったが依然として眠くならない。それどころか小河内を過ぎてからは、が然道は狭くなり大きくカーブする毎に、そのまゝ谷に飛び込みはしないかと唯運転手の手元を凝視するのに寝む気もどかやらへ、おすすりに

最後部に乗った為、しばしの間もジッとしておれず表山で下車してホッと一息おかげで頭のモヤ〳〵はフッ飛んでしまった。直に出発、おなじみの飯橋に多摩川をわたり三頭へ向って第一歩を踏み出した。幸ひな事に気づかわれた天気も此の頃から雪が切れ日が指し始めて来た。そこで出発記念としてシャッターを切る。やがて多摩の一支流である峰沢へと右の谷に入り込んで行く。しばらくして河内から来た道と峰沢部落にて合し日指す風張方面のと別れるあたりから道はやうやく山らしくなって来た。加茂神社の前にて一時荷を下し上着を取り餘々軽装になって再びゆるい登りを歩き出す。その時数馬より来たと云う人が二三人山を下りて来るのに合ふ。聞くと今日は三頭に大部人が来ているとの事。「あまり人が込まのは面白くない。」と思いながら出発を続ける。キャラメルを食べるせいか咽喉が乾いてたまらないので、いけないと知りながら水をがぶのみして、いつもの事ながら、すぐ水筒を空にしてしまった。この沢は水量が少いせいか奥多摩でよく見受ける山落田のそれらしいものは一つ

雨男は誰？

『雨男』は神島か笹野か？」

これはもっぱら三年生部員の間での話題であるが山行きには、この二人いつも一しょに行くので、どちらが雨男か判断する事が出来ない。但しいつも山へ一緒に行くからと云って決して仲が良いわけではない。この二人昨年の夏休には赤城山へキャンプに行って三晩のうち二晩雨に降られおまけに二晩は赤城特有のスゲー雷に襲はれ一晩中テントのポールにつかまってふるえていたと云う記録保持者。それ以来二人が山に行くには必ず雨に降られる。おまけに先日の卒業生送別会とき カゴロゴロやられて御前山への急登を疲れも忘れて、無中になって登ってしまった程だ。

しかし両者にはそれ〴〵の云ひ分がある。

神島曰く「昨秋の丹沢行きの時は、笹野が行かなかったので、天気がものすごくよかったぞ」

笹野曰く「二月の時は俺の方は降らなかったが神島の方は雪が降ったじゃないか」

（註＝二月五日同じ日に笹野は川乗山へ神島は箱根にそれ〴〵別に行った。）

さて皆さんこれらの言葉を参考にしてどちらが雨男かを決め雨男の方は部から追放しやうではないか……。—(S)—

朝見た　曙ダ　と

も見当らなかった。日指から小一時間も来た頃から遂に日の光も指し込まぬ樹蔭なる杉林に入りぬ。登りも急にきつくなる。下を向いて一歩一歩ジッと踏つた杉の落葉を踏しめて幾度もターンしてやっと十時十分幾度峠についた。眞新しい指導標のそばに腰を下し、秋川の方を眺めたが此のあたりはまだ霧が立ち込めていて何と偉かしこうの尾根だけが薄く見えるだった。汗が冷えて寒く力って来たのでやうやう御こしを上げたが此處からの登りは今までに増して急で、しかも登る一方だったが

さ程疲れもしないで無事三頭山頂に着く事が出来た。三角点のある中央峯で昼食をとる。あたりは一面霧におほわれ、たまにそれが切れて、むかうの方がチラリ〳〵と見えるだけで全く眺望効かない。その切れ目から指し込む日を待ちうけてシャッターを押す。今日はこれから御前山縦走する予定なので、あまり貴重でノンビリしては居られない。十二時十分に出発して一気に数馬峠まで降け下りる。そこから今までと反対側の尾根を登り、二三丘を越すと、うらぶれた感じの風張峠に出る。名前の示す通り少さな木々の枝々を震はして冷い風がヒューヒューと吹き抜けて居た。峠を過ぎると次に月夜見の登りにかゝる。登ると云っても大した事もなく二時丁度山頂に着く。頭形の小屋で、どこからか割りと高く上る道路が見下せた。月夜見から小河内峠までは見晴らしのきく快的な尾根の緩いメロディーの連続である。歌ったり叫んだり寝ころんだり　雄(?)　寝ようったり　焼けばり

めれた茅戸の原の一面に二三〳〵出している藻を摘んだりしてハしばし時のたつのを忘れて居た。が次第に寒くして私の最も嫌いな霧に囲まれた。ピッ　すると空腹を感じるやうな錯覚を覚えた。音が谷中の方から響いて来るのを聞いた。タッと雨を帯びて来る雨を止める手を止めて振り返るの間に摘んだ草に夢中になって気がつかなかった黒雲が何時の間にやら三頭の方からジリ〳〵押し寄せて来ていた。三頭のあたりはもう降っているらしく霧が盛んに湧き昇って此方へ向って流れて来てとうとう本降の強い光線を遮ってしまった。日が隠れると西の方から風雲い様気を帯びた風がフッフッと顔に吹き寄せて来る。あわてゝルツクをしばりなおし一揉りゆすり上げ無汗になって御前の辛い登りを一散に登り始める。夕立に合ったらそれこそ〳〵とんでもない目に合う。手には三脚の附いたカメラ〳〵何の二上は力い避難所なかっいで降るかと少しも要りない。北岳の難を知ってからは、山の雷に対しては急に恐病になってしまった。恐も何も放棄げて無命に登りに登る。つて一瀑水落ちる様な雨も我ぐはず登りに登る。疲れて立ち止まる毎にドスンゴロ〳〵と彼の雷が南えて来る。それがしかもだん〳〵近づいて来る様なので一しばしも休んでは居られず、遂立てられる様にしやにむに前進を続けた。気を紛にする為カメラをルツクにしまうすう。皆へタ〳〵になって御前に着いて耳を塞ますといゝ按排に雷の道はそれて居るらしい。ホッと一息して火を起こし冷えた手を乾かす。山で雨に合ふぐらい悲惨な事はない。

せっかく楽しかった午前中の思出も、ぐしょ濡れになって後る所だった。…あまり遅くなってもいけないので、いよ〳〵山々にお別れを告げてから栃窪に向って急な下り坂を膝頭をかく〳〵になる十歩手前あたりまで下るともう栃窪の部落が見えて来た。この辺りの下りはドンドコ沢の下りに比べると物の数ではない。栃窪沢には立派な山程田が幾段も幾段も連なって作られ遠んだ水が、その間をサラサラと流れていた。栃窪を過ぎると坂ももうなくなり道も大きくなってあたりは急に云々として来た。道の正面に見える六ツ石山も下るにつれて前山の背にだん〳〵隠れて行く。そして右に大きくカーブすると目下に深い〳〵多摩川の流れが開けた。此所から見ると黒々とした岩やその上に萌立つ青葉若葉それに真白い道路、面白く組合された鉄橋、それ等が調和し非常に美しい眺めを形作って居る。やがて境橋のたもとに出た。こゝまで下るともう旅も終りに近い。ノンビリと家々のかまどから昇る夕げの煙にボーッと烟った美しい多摩川の渓谷を眺めて一日中の色々の出来事を楽しい思出とすべく一つ〳〵しっかりと脳の内に刻み込みつゝ今日の上りである氷川駅へと急いだのである。対岸でウグイスが鳴いている。

〈完〉

山林

夏休が来たら

三A　神島一郎

夏が来たならば
山へ行かう
あの男性的な山へ——。
飛騨か　日光か　奥多摩か
夏の強烈な日光を浴びて行かう。

山の新鮮な空気を吸うと
僕は野獣の様になる。
そして岩を　崖をよじのぼる
また滝でも　沢でも登り出す。

くたびれはて〻山頂につく
附近の山や　近くの森は
皆僕の眼下にある
あゝ　何と大自然は大きいのだらう。

僕は最も山を愛する。
何かでも夏の山を——。
僕の心はいつでも山の方に飛んでいる。
家にいる時も学校にいる時も。
夏休が来たならば
山へ行かう
きっと行かう
あの男性的な山へ——。
山の新鮮な空気を吸ひに。

新入歓迎第二十五回例会

御前山

日帰り

五月二十八日　快晴後雨

〔コース〕立川駅―氷川駅―小留浦―檜村―栃寄―炭焼小屋―縦走路―御前山―栃寄分岐―鞘口山―大沢小屋―小留浦―辨天峡―氷川駅

〔タイム〕無し

〔参加者〕2E田中実　2E鈴木

田中実

もし楽しみとか計画をその日一日にもつならばふられてだまされて降られた時程落胆の底を衝くことはない。もし我々が単なるハイキング・マンだったら「あの日」は「あの時は」と凡そ去り行く迄の語りぐさとなりやがてはその存在になにものかの悪言をつけないとは限らないであらう。しかしこの日の登山は總を二人で終え、しかも予定コースの半分にも及ばなかったとは云えその間に赤誠の二人にとって「雨中の山登り」と云言葉に秘める無限の苦労の一部を得たことは過去の「山登り」を反省すると共に、未来の「登山」に与へる力強い資料であった。さて前夜の不安は夢に流し

準備万全を期して一夜を明った十人も引続く低気圧に実現は空想へと一変し總てが幻と化したのである。決行型の鈴木とは、阿佐ケ谷駅からの同伴にしかも約束された晴天は日ノ出と共にその面目を発揮し、ただ二人は八人の参加を密にいだき、新緑匂ふ冷気も寒く霧深き單線路を山中へと延していった。氷川着八時四分。

バスに乗らうぜ」「止めようぜ」と時間表を見直す。結局は三十分も間があるとて先づ一歩を踏出す。踏みなれた土、なじみの道路しかも今朝は水分をたっぷり含め無風晴快もならば七、八人の同伴者があって足は人より先に出たがる。いつたってか前も後も我二人、その心細い事がまた楽し。例によって田舎の若い者は振り返って学校通いの子供達は立止って我々を眺めている。もっとも毎度の事だが、あきれてはいるが、これだけではなんとなく感情を害されるような気がする。一つ橋を渡るとだんだん水の音は遠くなり、しばらくすると又激流の音に橋をわたる。橋上より見下すと夜来の雨にその色はどくどくしい。濁れる音は大雨の如き、小留浦部落を後に迎へたところが昭和八年二月完成と書いてある辨天橋である。

普通氷川―栃寄―御前山のコース嘴さ95/100人までぶものはその渓流に誘はれトンネルを抜けて曲りくねった二十五分間で境部落の前に来るが距離的に考へ文明は不利だと知っ

た我々は橋を渡る手前で右へ回り大沢を横切った。谷に流れつめたい空気は我々を一層励ましてくれる。左に栃窪の山を見ながら右に多摩川の激流を控えたこの径は危いながらも山気分を味はせてくれる。前夜の雨に雑草はあまりにも元気よく路下一尺は歩はずしてびしょびしょになってしまった。辺り止めに枝を切り出し本格的に歩き始めた。この頃相模の空により先づ一休とする。しめり気を帯びた道。　キラキラ光る河は時々バス・トラックの新へ　陰の　キラキラ光る河は時々バス・トラックを巨岩流木もまじえて無言の友となってくれる。時計のない二人に相当歩いたと思った頃尋ねてみるとこゝが檜村ですよと云う返事に平ッ！　もっと急ごうぜと云い合って見たものゝ何年も人の気配なき小径は進む事三度。しかも雨足両手ずぶぬれのところに照りつける太陽は強く衣服をつけて風呂に入る事を想像する。この間にあって鈴木君の説による木苺とか云う一種のブドウの様な味のする木の実は春今の初夏を山の香りに誘い淋しい春の山道を名も知らぬ白き小花や時おくれじと鳴く鶯と共に行く二人をこよなく楽ませてくれた。山彦屋根を過ぎる辺りから雑木は見渡す限りの無樹帯となり道は左に廻る。ごうごうと唸えていた流も巨岩の対立もかすかなさゝやきに変りはるか下を流るバスらしい橋桁に一隊立止まる。目をはるか彼方に移すに真青の空に続く山々と一つ二つ頭を現わした真白い雲はさながら天然色映画の大豆篇を思はせる。気楽に進ませた足はやがて右前方に栃窪橋左にシダクラ尾根を見更に五分程行くと約三十米下に始めて我々が通るべきコースを見る。渡へるに氷川駅からこゝまで約四十分で来られるところを興味を誘った廻り道二時間余りを費した事は一時的の行楽を反省すると共に日程の重圧を感じてならなかった。道は二米以上の巾で馬車の轍が二本の流で。はっきり示されている。右側に同行する栃窪氷も水量こそ増しているがその澄んだ清らかさは、やはり山でしか見られない一種独特の美しさが漲っている。近景遠景に目はつい下を忘れる頃呆々とした水たまりに足を落す。どうせびしょ　なんだからかまわ　ぬえゝと云った二人もその時は互に考合と云う事を忘れたゝいたであろう。同行者の沢とは約十分初めて歩く手を結んだ所で一休とした。ここで何と云っても目を引かれ勝なのは奥多摩名産山桃の段畠々である。いつもは不景気の様な水も今日は五月雨に殺はさながら滝のやうな水勢である。雨雨降ってこそは山の幸なのであらうか。親父にちはれかやったんだと親孝行の鈴木氏の為か鮎の釣身か二三本失敬する根平はかりで本根は細い。しかしやはり貴重品ものである。リュック深くこれをおさめリンゴをかぢりながら出発の準備にかゝった。とどの時人の気配は昨日の前で流された筈のこの谷にかすかにしのび入る歌音を感じる。丸太に板を打

打ちつけた橋は不気味に揺る。大きく振返ると約百米後に確かに登山者が我々を追ふ。道はじとピッチを上げたがめんどうくさい様な凸凹の道、追はれる者のつらさは、いかんともなく無茶に早い彼等に笑顔で前をゆづる。再び訪れた二人の世界に声でさくやく賜る。小径は或る所は沢の右に或る時は沢の左に勾配は平均して二人を御前へと導んでくれる。はず部落がその才一の目的だった。しかしそれさえ形を見せずまったく無人島に生きる存在となってしまった。無風快晴一点の雲さえ見られなかったこの日の空も又々怪気圧の発生か、その雲はだんだんベイの如き発育に最初の炭焼小屋を過る頃には水滴が濡れるを感じた。平丸に歩いたとは云へその間沢に立てる大岩石所々に見られる山巷の夜景、薄暗い林道、小道、小広い河原、山腹焼き小屋、岩石相対に人目を引く蹴鞠一輪とすべてが上での面白ある存在を今日のみやげに、いや重なる印象にその一片を与へてくれた。

「もうやむよ」これはよく山にある雨だと高雇にしていた空も遂にふれて今鬼一面ベッタリ雲も接え、二人をあざむいた。遂に雨具に道具が悲喜劇に降雨の水んの如く急な勾配に小川せましと流れゆく。すでに雨は合羽を通して達するべきところまでしみつあるが、計画は行樂に行樂は困難な困難を感へと一変し遂に小径は殺伐へと一路をたどる。

さて日時計候用不能　時計万年十二時の我々は時と云ふを切る与へてくれたのは四つめの炭焼小屋に食る半鐘主体的存在の優しい若者だった。

「もう十一時一五分過ぎですから登山に間上は無理でせう」「今日はもう三四人も登ったと行きましたよ」「どうもすみません」と別れたが我々大都会人も顔負けする様な人間のした黒い若者にただつ優しい人だなあしとうかづいてシダクラ屋根に接した明るい径を今日の収穫へと希望をつづった。径は沢を左に離れ右に尾根を取付けて目前に大笠山々を見る。二つの炭焼小屋によって無意にも食い甚されたこの笠山は出前つた若草も冠い云に下げた頭が上からない。遠かから聞える合唱、犬の声、鶏の声いかめしい自然に吾生のメロデーとして行くれて青空は磨をかきわけ耳を出し太陽三筋脱捨てゝ雨また天トへと変入する。午前の小屋前に辿り着くと前を塞ぐ二人が喜食を終えたのか荷足さう友顔で我を迎える。脚のカはぐっと抜き彼等を見通して目を下から上へ釣り上げる目とりに発生する雷得もうくゝといやが上にも見晴をことわる。自体は底冷えにずっとしているのは空腹よりもつらい。

「雨のひどい時君達どこ歩いていたのか」「学校どこ？」「じゃ僕の後輩だね」「僕がいた頃の先生で今残っているのは細川先生だけらしいね」「中は軍事教練で有名だ

った。「今年は東大に何人入ったか」と話し掛ける。先輩はよいが合唱に歌ふ合唱は、耳もさぎたくなる程だった。が最初の本を出して歌っている眞剣になっている顔を見ると笑ったりする事等は出来ず、つがれたにごり酒は、ふやけた生米の如く喉を通過する。歌い歌いまくった二人は若干足顔に準備を整えるが彼等の中の一人は先程から見ていると勝手に遊び、出発をあせる。後で聞くと云う事を聞いた。山とつんぼ、つんぼと山、これこそ不具の身を知らない本当の山愛好者ではないだらうか。最後の炭焼小屋に向く人の明朝に繼走路向近と知った一行五人はやがての成果に先をあせる。これよりザイルも使いたいやうな急斜面も途中で途を失ひ、遂に二人と分裂す。たよれる本はことごとく抜け二歩上って一歩下る事数十回、手足膝腰は衰れなる褐色に人はもちろん自分さえ忘れがちとなる。たまたま立歩って見上げるとどの木からいやどの花から落ちたのだらうか、やわらかいしづくは鼻の横を通って首に流れ込む。鈴木は と目を移すと彼は眞剣に登ってくる目合さずして息を呑んだ。さて今日最大の難関を切り抜けた五人もヤホー」「ヤホー」の声まったく枯れ再び二隊となって頂上をめざす。過去の苦労はせめて景色でもと思って絶景を期待したが眞白い霧は二米先の母ルオガセ」さえ見せてくれない。山・山・山を知った我々は、どこえ山への憧を見出せるのだらうか、やがて森林は星幕の左下に赤外線かった小径を見る。この径は、その名にそむかず一意の苦心は見られる。道に迷って開れる径、どこに立止って振げる地図、小留まれら歩いた半日の径にしかも最もポピュラーと云はれるこの御山前路に跡形一つ見せぬ指導標、これがポピュラーと云はれる意味かと見つめる地図に径はない。つる〳〵の径に降りつづく雨、最早不安な二人は書を夜と考へ道を谷と考へて行く泥を足にまかせ頭中降路から結末にとのり出す。降り出す雨も恐ろしき霧にその姿を失ひ、かすかに聞える「ヤホー」も「返事のヤホー」に後を絶つ右に曲り正に下り右に過って正面に上る御山前こゝも辺りを見渡すも、どの気配なく希望全く色を失ひ。それにもまして頭の先から足の先さてはリュックの中まで三日ぶりに風呂をた霧の様なその体重ない事は云うまでもなく疲過つにつれて、しめつける様な空気にも以をおめる声空しく手先は永久に無感覚状態に落入りつゝあるのを形容して知っていた。二の隊二人の人間二人の登山者は、かすかに聞きなれぬ言葉を聞いた。「なにしとる」「こゝやこゝや」一旦は歩くと出した。しかしそれは幻の声であったのだ。二人は失望した。だが再び叫ぶ「ヤホー」「ヤホー」失望した二人にも未だ山に登らない様な馬鹿らしい事は知っていた。

「いこう」「うん、いこう」いつの世か作られ

た小径も荒れ狂ふ雑木にあると云うより跡があると云う方が早いだらう両側から入り乱れるすさまじき戦ひ、傾斜はなめらかなれどいやと云う程、ひっかきまわす石知ぬぬ雑木にもくしてせげ去る様に前進する事約十分、ニーれど嘘も誠も道理も知らう一四〇四・九米の等三角点を頂く御前山頂なのであった。一瞬見合す顔と顔・汗か滴かしづくか雨かいや何でもないこれこそ苦心の結晶を現はした笑顔なのであった。雑木繁茂ならともかく深い霧に展望は全く失ってはいるが静思と瞑想に耽ふこの山頂の明るい樹間の憩をしみじみと味ひこれで数知れぬ山々の一片を征服したのだと思うと過去の苦労は春風と共に見えない山へと去って行った。

（完）

山は神聖である
だから許されぬ限り山を傷めてはいけない。
山は我々山男にとって最も親しき友である
しかし山を軽蔑してはならぬ
何故ならば彼は、きっとそれに対して罰を与へるだらう。
—山男—

山麓通信 3

小河内線バス増発運転

小河内・丹波山方面行時刻表

丹波	鴨沢	川野	鶴川	出野	熱海	水根	中山	梅沢	境	氷川
		7.40	7.30	7.22	7.20	7.16	7.09	7.07	7.07	6.55
		8.15	8.01	7.57	7.55	7.45	7.44	7.42	7.38	7.30
						8.20	8.19	8.17	8.13	8.05
10.15	9.50	9.40	9.25	9.15	9.07	9.05	8.55	8.54	8.52	8.48	8.40
							9.30	9.29	9.27	9.23	9.15
				10.25	10.21	10.17	10.05	10.04	10.02	9.58	9.50
		11.45	11.35	11.31	11.27		11.15	11.14	11.12	11.08	11.00
							11.50	11.49	11.47	11.43	11.35
13.55	13.30	13.20	12.55	12.45	12.37	12.35	12.25	12.24	12.22	12.18	12.10
							13.00	12.59	12.57	12.53	12.45
				13.55	13.47	13.45	13.35	13.34	13.32	13.28	13.20
		15.15	15.05	14.57	14.55	14.45	14.44	14.42	14.38	14.30
							15.25	15.24	15.22	15.18	15.10
			16.15	16.07	16.05	15.53	15.54	15.52	16.23	15.40
							16.30	16.29	16.27	16.58	16.15
		17.35	17.25	17.17	17.15	17.05	17.04	17.02	17.33	16.50
							18.40	17.39	17.37	18.08	17.25
19.30	19.10		18.00	18.45	18.35	18.27	18.25	18.15	18.14	18.12	18.08	18.00
								18.50	18.50	18.47	18.43	18.35

○丹波より氷川方面バス

丹波	鴨沢	河野	氷川		
五、一〇	五、四〇	六、〇〇	六、四〇		
		七、五〇	八、三〇		
		八、三〇	九、一〇		
七、一〇	七、四〇	七、〇〇	一一、四〇		
		一三、一〇	一三、五〇		
		一五、三〇	一六、一〇		
一六、〇〇	一六、三〇	一六、四五	一七、三五		
		一七、四〇	一八、三〇		

その他水根、河内発省略

○桧尾小屋……無人　薪水あり　出入自由　期不可　二十人收容可

○雲取小屋……富田秀雄常住　百五十人收容可　日原谷唐松谷右岸

○尊仏小屋……丹沢塔ヶ岳頂にあり　五十人收容可　山頂より武州側へ二十分　百円

○泉水谷造林小屋……泉水谷支流牛首谷右岸　夏　番人居り　水場十分　百三十円

○長兵衛小屋……使用不可　外形のみ　夏期人夫住　薪豊富

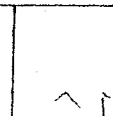
○悪谷小屋……小川谷支流割谷源頭にあり　上日川峠　(昭廿四年八月)

○日原新道に常住小屋一　サイド大破　雨やどり程度のもの二つあり

○雲取小屋と尊仏小屋は、シーズン中はなるべく予約しておくオガ良い　満員になる恐あり。

○日原本流縦行の場合は、鉄砲流しに注意

○唐松谷の林道は、やゝ荒れぎみだが、唐松谷―日原間の谷にそう新道は桟橋が割合に新しいから、なれた人は時間的に大ブナ別へ行くよりも良いだらう。



〔後記〕

御多忙中のところ、御投稿下さった諸兄に対して御礼申し上げます。中間考査によって発刊のおくれました事をお詫び願って、次号のよりよき発展を今からお約束致します。又内容が前号の紀行文的なものとなって単純になってしまいましたが、今後はなるべく山行の研究的なものと又楽しい山行のお便りを期待しております。次号は九月になるだらうと思いますので、夏期に得た便りをどしゝ御投稿して下さるやう又個人作も大いに発表していただきます。

部報　第三号
―非売品―
昭和二十五年六月十七日印刷
昭和二十五年六月二十日発行
編集者　森澤勇治
発行人　笹野幸夫
発行所　都立西高等学校山岳部
東京都杉並区大宮上町三ノ一八

西高山岳部報正誤表

頁	段	行	誤	正
1	上	8	今度×	今後。
1	上	8	通×感×	痛。感。
2	上	4	制度×	制定。
4	下	26	迎ぎ見つ、	仰ぎ見つ、
5	上	4	伊豆半×島×	伊豆七。島。
5	下	22	下る×	下り。
6	上	15	往々として	往々にして
6	下	21	即に	既に
8	上	7	槽×	漕。
8	下	23	木	木
9	上	4	足	足。
9	上	7	白石×	白石。
10	上	20	倉×	倉沢。
11	上	18	橋×	橋
11	上	11	ラ×ロッキー	ラ。ロッキー
11	下	11	試みとして	試みとして
12	下	3	行くには	行くと。
12	下	30	混む×	混む
13	下	1	冷えて×	冷えた。
13	下	1	汗	汗
13	下	1	夏×	休。
13	下	1	が	が

〔追加〕十頁

廿五年度送別會　三頭行

（タイム）

氷川山荘（六四〇）―氷川駅（六五五）〔川師行バス〕―参山（七・三七～七・四五）―山沢部落（八・三〇）―数馬峠（一〇・一〇～一〇・二〇）―三頭山頂（一一・一〇～一二・一〇）―数馬峠（一二・四三～一二・五〇）―風張峠（一三・二五～一三・四〇）―月夜見山（一四・〇～一四・一〇）―小河内峠（一五・〇～一五・一〇）―御前山（一六・〇～一六・三〇）―稲寄部落（一七・三〇）―境橋（一八・一〇）―氷川山荘（一八・五〇）

○三頭山行計画　富士山

○費用　約五百円

○コース　吉田口―八合目（泊）―山頂―御殿場口

○期日　八月上旬（第二期講習終了後）

部報寄贈　御礼

都立豊多摩高等學校　山岳部殿
都立立川高等學校　山岳部殿
都立九段高等學校　山岳部殿
都立大泉高等學校　山岳部殿